

日本の結核研究の動向と「結核」誌のあり方

森 亨

要旨：近年の結核関連論文の刊行状況に関する分析報告から日本人研究者による英語および日本語論文の刊行の傾向について紹介した。国内の結核論文の刊行状況，ならびに本学会機関誌「結核」の最近の刊行内容の傾向を概観し，日本の結核研究のために「結核」誌をどのように活かすべきかについて提言をした。

キーワード：計量書誌学，結核研究，学会誌

本誌編集部から最近投稿が少ないという話を聞き，その原因や対応についていろいろと思いをめぐらせていたやさき，国際結核肺疾患対策連合の機関誌である *International Journal of Tuberculosis and Lung Diseases* に興味深く，考えさせられる論文が掲載された。既にお読みにになった会員も多いこととは思うが，ここに簡単に紹介し，あわせて日本の結核研究や「結核」誌のあり方について考えてみたい。

問題の論文はスペインの J. M. Ramos らによるもので，この著者らは手近な医学文献データベースである PubMed から，1997年から2006年までの期間について“tuberculosis”または“tuberculous”のキーワードをもつ論文を検索した。その結果35,735件の論文がヒットしたが，対象期間中に年平均4.7%ずつ増加していた。増加したのは主として英文の論文であり，それ以外の言語の論文はほぼ横ばいであった。その結果英文論文の割合は1997年の73%から2006年の81%へと増大した。

雑誌のタイプでは論文の4.6%が電子出版によるもので，雑誌数は合計2,874誌であり，そのうち16誌だけで総論文の25%，また117誌だけで50%を占めていた。上位18誌は以下のとおりであった（数字は論文件数。カッコ内は総件数に対する割合%）。*Int J Tuberc Lung Dis* 2,024 (5.7), *Problemy tuberkuleza* 917 (2.6), *Journal of Clinical Microbiology* 726 (2.0), *Kekkaku* 611 (1.7) (下線森), *Infection and Immunity* 591 (1.7), *Problemy tuberkuleza i bolezne. legkikh* 563 (1.6), *Clinical Infectious Diseases* 447

(1.3), *Lancet* 360 (1.0), *Journal of Immunology* 319 (0.9), *AJRCCM* 318 (0.9), *Zhonghua JieHe He HuXi ZaZhi* (中華結核和呼吸雑誌) 317 (0.9), *Chest* 291 (0.8), *Tuberculosis* (Edinb) 269 (0.8), *Journal of Infectious Diseases* 250 (0.7), *Journal of Biological Chemistry* 242 (0.7), *Antimicrobi Agents Chemother* 241 (0.7), *Journal of Bacteriology* 194 (0.5), *AIDS* 180 (0.5)。このように全誌の中でわが「結核」は世界第4の刊行論文数を誇っているのである。他にも非英語誌では2位，6位にロシア語誌が，11位に中国語誌が入る。

次にこれらの論文の筆頭著者の所属機関の国別に，刊行された論文のうち英語で書かれたものの割合を見ている。韓国(97%)をトップにスペイン，フランス，ドイツ，スイス，オランダ，ブラジル，イタリア，トルコなどが50%を超えており，ポーランド，ロシア，日本，中国では50%以下である（日本は46%）。つまり韓国などではPubMedに収載される文献は母国語のものが少なく，逆に日本人の研究者は日本語で論文を投稿することが多いということになる。このことに対してわが「結核」が重要な役割を果たしていることは紛れもないことであろう。

次に研究活動の地理的分布として，筆頭著者所属機関の所在地域別の刊行件数等を見ている（表）。この表とは別に国ごとにも見ているが，刊行件数で日本は米国，インドについて3位である。しかし「人口対率」で見ると多くの欧米諸国に抜かれて22位となり，また「対結核患者数あたり」では28位と順位はさらに低くなる。

表 筆頭著者所属機関の所在地域別に見た刊行件数¹⁾

	編 (%)	対人口	対 GDP	対結核患者数
西欧	8709 (29.8)	21.70	0.61	17.59
米国	6159 (21.0)	20.57	0.47	43.56
アジア (日本以外)	5814 (19.9)	1.6	0.82	0.11
日本	2083 (7.1) ^{a)}	16.33 ^{b)}	0.48 ^{c)}	5.78 ^{d)}
東欧	2036 (6.9)	2.14	1.88	0.07
アフリカ	1988 (6.8)	4.30	0.76	0.53
中南米	1285 (4.4)	2.29	0.44	0.38
オセアニア	600 (2.1)	18.09	0.58	3.40
カナダ	580 (2.0)	17.82	0.46	38.11

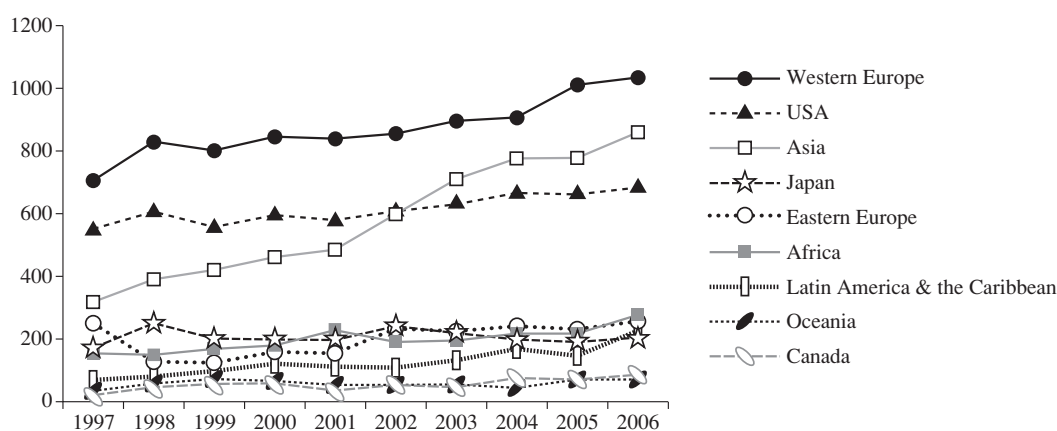
刊行件数 (上から米国, インド, 日本)

対人口: 人口百万対論文数 (同スイス, ニュージーランド, デンマーク)

対 GDP: GDP 10億米ドル対論文数 (同ガンビア, マラウイ, ギニアビサウ)

対患者数: 推定新患者数100人対論文数 (アイスランド, スイス, ノルウェー)

日本の指標値の順位: ^{a)} 3位, ^{b)} 22位, ^{c)} >30位, ^{d)} 28位

図1 国別に見た刊行件数の推移¹⁾

つまり国内の結核問題のわりに日本人による研究のアウトプットが少ないということになる。

1997年から2006年にかけての変化を見ると (図1), 中南米 (2.9%→6.3%), アジア (13.9%→23.1%) では増加が著しく, これに対して米国 (24.1%→18.4%), 西欧 (31.8%→29.2%) は下がっており, その結果米国は順位も2006年には3位となっている。日本の順位は明記されていないが, 図に見るようにこの間ほぼ件数は横ばいであるから, 国別の順位はかなり低下したものと考えられる。

日本について要約すると, 中南米やアジアを中心に世界的に高まりつつある結核研究熱の中, 日本は自らの結核問題の大きさに比して研究が手薄であり, また近年勢いが弱まっている。しかし「結核」は他の日本語誌とともに自国語の論文発表の有力な媒体としての地位を維持している, ということになろうか。

国内的に結核関連論文の刊行状況の推移を, 医学中央雑誌 (医中誌) データベースで見てみた。非常に単純に「結核」をキーワードとして1983年から2008年までの

26年についてヒットした刊行件数 (年間あたり) は図2に見るように推移している。1983年から1995年までは1,000件~1,300件の間で停滞するがその後上昇に転じ, 2001年のピーク (2,326件) を迎え, その後やや低下するが2000台を保っている。時代とともに医中誌の収載誌自体も増加していることも考慮し, また医中誌収載件数全体に代表される研究活動全体のなかでの結核研究の位置づけを見るために, 全体に対する「結核」刊行件数の比率の推移を見たのが図3である。1983年 (0.85%) から1995年 (0.43%) への漸減, その後の2001年 (0.83%) に向かっての反騰, そして2008年の0.55%へと再び漸減, という傾向になっている。1990年代後半の結核罹患率の逆転上昇, 1999年の「結核緊急事態宣言」による結核論文刊行のU字現象は終わり, 再び1989年代前半からの漸減傾向に戻りつつあるように見える。これは英文論文を含めた傾向と軌を一にしているといえよう。

ここで冒頭の問題—「結核」誌への投稿論文の潤滑傾向—に戻って, わが「結核」誌の記事の推移をまとめてみた。図4は記事の区分ごとに1997年~2008年の各巻

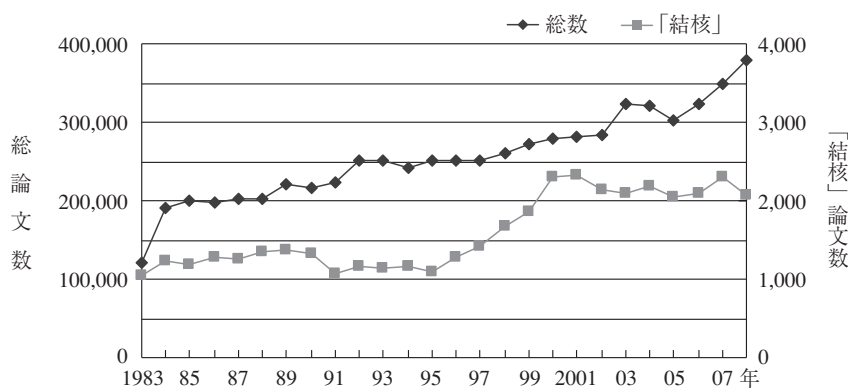


図2 医中誌掲載総件数および「結核」論文件数の推移

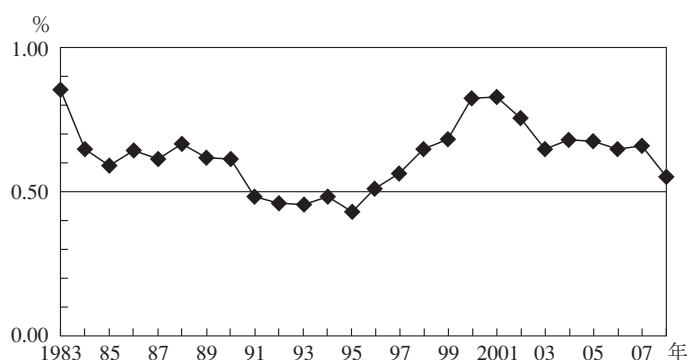


図3 医中誌総掲載件数に対する「結核」論文の比率の推移

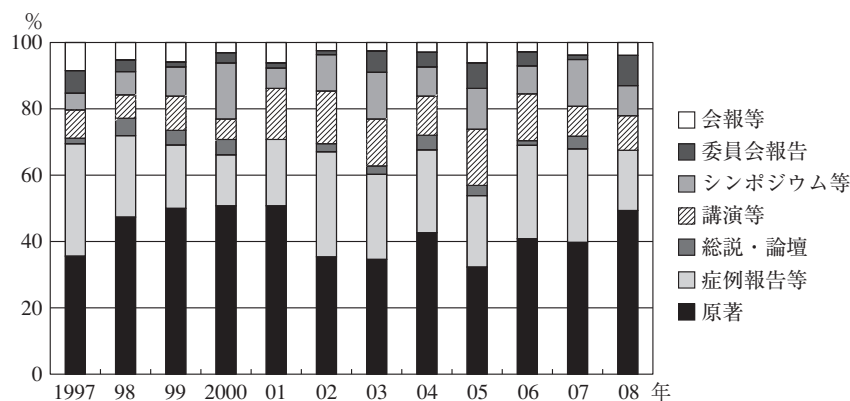


図4 「結核」誌掲載記事の区分の推移

合計11号（総会特集号を除く）に占める記事の件数の比率の推移を見たものである。

まず総ページ数は、平均して809ページ、レンジは719（1997年）～971（2007年）と幅があるが、大型の委員会声明（1999年、2007年）などによる変動であって系統的变化はなく、この数年間でも減少傾向はない。なお、2002年からはサイズ（判）が従来のB5からA4へと大きくなったが、1ページ当たりの字数は変わらない。

内容を見ると、原著は平均29.3編、レンジ21～38編で、

これも2000年前後に小さなピークが見られるが、この後2005年の（特異？）不調を除いて30編前後で一定、2008年（38編）にやや増加している。症例報告等（活動報告、資料を含む）は平均16.9編、レンジ26～10編で、これも全期間通して大きな変化はない。

以上をまとめると、論文刊行件数で見た日本の結核研究はこの10年くらいは退潮ムードにあり、（英文論文による）世界への成果の発信という点でも同様である、といわなければならない。そのなかでわが「結核」誌にあってはどうかその役割を維持してきている、といって

いいであろう。しかし最近の状況を見ると、たとえば2009年1月、2月、3月、4月号の原著はそれぞれ3、1、2、0編であり、冒頭に述べたように懸念を禁じえない。査読や再投稿の遅れが重なったということもありうるが、PubMedや医中誌の動向から推定される研究活動の停滞が、本誌にも影を落とし始めているということはないだろうか。

学会機関誌として、その刊行実績は学会員の研究活動の反映であると同時に、研究活動にも影響を与える。優れた誌面は研究を刺激し、向上させる。このような観点から本誌は従来以上に積極的な誌面作りをめざすべきである。その参考として *Int J Tuberc Lung Dis* を見てみると、記事の区分として、原著 (Original article)、短報 (Short communications)、総説 (Review article)、各種報告 (Official statements, Meeting report) などわれわれと共通のものほかに、Editorial, State of the Art, Educational series, Unsolved issues, Founders of our Knowledge など (基本的には依頼原稿) を随時組んで読者を刺激している。「結核」誌ではごくまれにしか掲載されない Correspondence のなかにキラリと光るものを発見することも少なくない。

同時に投稿する側にも期待したいことがある。まず、研究や専門家としての活動を論文にして世に問う手間をいとわないことである。私自身も多分にそうだが、重要な知見を得ながらきちんと発表しそびれたものが (口演やポスターだけで終わったものも含めて) いかに多いことか。これでは研究に協力してくれた患者や世間一般に顔向けできない、と考える必要がある。

やっと論文にした段で、「いい研究の成果ならばインパクトファクター (IF) もつかない和文誌ではなく、英文誌に投稿するのは当たり前でしょう」といわれる。圧

倒的な「英語至上主義」に屈するのも悔しいが、現に英文誌に一流誌といわれるものがあり、その影響力も無視できない現実ではそれも仕方がない点はある。しかし、論文の中には日本国内でこそ真のインパクトの大きいものもある。それを無理して欧文誌に投稿し、日本の状況に無知なレフェリーに酷評され、ひどい場合には事実をゆがめてレフェリーに迎合するような書き方をしてまでアクセプトを勝ち取ったような論文すらある (このあたりは、IF万能に陥りがちな「研究評価者」側もよく考える必要がある)。しかも、わが「結核」誌には英文抄録と英文の図表注釈というよき伝統があり、それゆえにPubMedにも収載されており、優れた論文ならばこれだけでも対外的にかなりの発信能力は発揮できる。これに関する好意的な意見を外国の友人からたびたび聞いている。

こんなことを考えれば、本来的に「結核」誌のような自国語誌の存在意義—その研究推進のうえでの役割—もしっかり残っているといえるし、われわれはもっと自信をもっていいと思う。その上で編集部も工夫をし、投稿者も労をいとわず、そして読者もより積極的に、それぞれ誌面作りに参加されるよう提言したい。以上、ごく最近の「結核」誌編集部の懸念に触発されて行った多少の検討をもとに勝手な思い入れを綴った。ご批判を仰ぎたい。

文 献

- 1) Ramos JM, Padilla S, Masia M, et al.: A bibliometric analysis of tuberculosis research indexed in PubMed, 1997-2006. *Int J Tuberc Lung Dis.* 2008 ; 12 : 1461-1468.

Issue

TRENDS OF TUBERCULOSIS RESEARCHES IN JAPAN AND THE ROLES OF *KEKKAKU*

Toru MORI

Abstract Based on a recent bibliometrics report on tuberculosis research, a brief introduction was made on the recent trends of scientific publications in English as well as in Japanese by Japanese researchers. The publication of tuberculosis papers in the Japanese journals and the changes in papers accommodated in *Kekkaku*, the official organ of the Japanese Society for Tuberculosis, were analysed. Finally, the roles for *Kekkaku* as a journal in Japanese language to activate the researches in Japan were discussed and some proposals were made.

Key words: Bibliometrics, Tuberculosis research, Journal publication

Leprosy Research Center, National Institute of Infectious Diseases

Correspondence to : Toru Mori, Research Institute of Tuberculosis, Japan Anti-Tuberculosis Association, 3-1-24, Matsuyama, Kiyose-shi, Tokyo 204-8533 Japan.
(E-mail : tmori-rit@jata.or.jp)